

書名：若き数学者のアメリカ

著者：藤原正彦

出版社：新潮社

出版年月：1981年6月

総ページ数：283ページ

ISBN：410124801X



推薦者

田中大輝

鳴門教育大学大学院講師
言語系コース（国語）

本書は、ミシガン大学に研究員として招かれた若き数学者（当時29歳）である著者自身による、3年に渡るアメリカ滞在記である。

著者にとって初めての海外であったことから、滞在初期の頃は、期待と不安の渦巻く中、自身が日本人であることを過剰に意識し、アメリカ人に対して強い対抗意識を持っていた。その結果、劣等感や疎外感に悩まされ、さらに日本への郷愁の念も加わって、生命の危険を意識するほどのノイローゼに陥ってしまう。その後、コロラド大学の助教授に採用され生活環境が変わると、徐々に知り合いが増え、多くの人に慕われるようになり、アメリカの中に完全に溶け込んだように見えるようになるのであるが、実はこの時期の著者は日本人であることを無理に意識の外に置いてアメリカ人の真似をしようと懸命になっていたのであり、人々の人気を博すれば博するほど物足りなさや淋しさを感じていたのであった。そのような著者が落ち着きを得たのはアメリカ滞在の最後の9か月においてであり、「他人の迷惑にならない限りはすべて自然な日本流で通すのがアメリカ社会に快く受け入れられる秘訣だと思われる」（pp.267-268）という境地に至り、ようやく日本人としてごく自然に振る舞うことができるようになったのであった。

推薦者が本書を手にしたのは、大学院博士課程在学中、ニュージーランドのオタゴ大学に、約9か月間、リサーチアシスタント兼ティーチングアシスタントとして赴くことが決まった頃であった。自身の境遇を著者と重ね合わせ、著者が悲壮感を漂わせれば自身も悲しみに暮れ、著者が敵愾心を剥き出しにすれば自身も攻撃心を募らせ、著者が拍手喝采を浴びれば自身も誇りに感じながら読み進めたことを覚えている。

著者が経験したのはアメリカ社会やアメリカ人という「異文化」との接触であったが、「異文化」接触というのは外国社会や外国人との接触に限らない。自身の出身地から見れば隣の街は「異文化」たりうるし、学生社会から見れば社会人社会は「異文化」そのものである。その他、性別、世代、出身校の違いなどもすべて「異文化」に通ずる。そのように考えると、本稿をご覧の皆さんはこれまでに様々な「異文化」と接触してきたと言えるだろうし、今後も様々な「異文化」と接することになるだろう。つまり、本書で綴られているのは、決して自分とは掛け離れた遠い国の出来事なのではなく、皆さん自身の経験そのものであり、また、今後、皆さんが経験するであろうことそのものでもあるのである。

そのため、「数学者」に限らず、また「アメリカ」渡航予定者に限らず、近々「異文化」に飛び込むことが決定している（たとえば就職、進学、教育実習などで）人や、将来の「異文化」接触に対して漠然とした不安を抱えている人、そして過去に「異文化」との接触において失敗した（と思っている）経験がある人など、すべての人に本書を薦めたい。

